

僕はラジオ

2004(平成16)年8月4日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督・製作＝マイク・トーリン／出演＝キューバ・グッディング Jr.／エド・ハリス／アルフレ・ウッドワード／S・エパサ・マーカーソン／デブラ・ウィンガー／クリス・マルケイ／サラ・ドリュエ（ソニー・ピクチャーズエンタテインメント配給／2003年アメリカ映画／109分）

……いつもラジオを持ち歩く、少し知的障害をもった黒人青年と高校のアメフトの名コーチとの心の交流を描く感動作。コーチはなぜ、この青年に手を差しのべたのか？ またそれは、コーチにとって、アメフトチームにとって、そして学校にとって、どんな意味をもつのか？ 人間同士の心の触れ合いの大切さを明確に教えてくれるこの映画を、大人はもちろん、すぐにキレル子供たちにも味わってもらいたいものだ。

ヒトにとって大切なもの！

ヒトはみな、それぞれ大切なものをもっている。家族や友人は大切だし、地位・名誉・カネだって大切なもの。また、趣味も大切。

高校の教師をしている主人公ハロルド・ジョーンズ（エド・ハリス）にとって大切なものは、自分の勤める高校のアメフトチームのコーチ（日本語では監督の方が正確か？）としての仕事。チームの後援者たちも、この名コーチを信頼しきっている。シーズンが始まると、彼はこのチームのことで頭の中がいっぱい。一人娘のメアリー（サラ・ドリュエ）は、父娘の触れ合いがないことを少しさびしく感じている様子。妻のリング（デブラ・ウィンガー）は、こんな夫を優しく見守っているが、少しは夫の関心を家族にも向けさせようと努力中……。

知的障害をもった青年

もう1人の主人公ジェームズ・ロバート・ケネディ（キューバ・グッディング

Jr.)は、理由ははっきりわからないものの、少し知的障害をもった黒人青年。母親マギー（S・エバサ・マーカーソン）の手1つで育てられているが、マギーも長時間勤務を余儀なくされているため、子供の世話には、なかなか手が回らない。

そんな中ジェームズは、いつも1人でショッピングカートを押しながら、アメフト練習場の周辺をウロウロしていた。このジェームズの唯一のお友達はラジオ。ジェームズは、いつもラジオを聞きながら1人の世界に入りこみ、ほとんど人と口を利くことのできない内気な青年だった。そんなジェームズと知り合ったジョーンズは、名前を聞いても答えてくれないため、ジョーンズはジェームズのことを「ラジオ」と名づけた。

知的障害の理由についてジョーンズが母親に聞いても、マギーは「人より少し頭の回転が遅いだけ」と説明。

ジョーンズがジェームズに「関心」をもったのは？

アメフトの練習場の周りをウロつくジェームズについては、誰も気にとめていなかった。彼に関心を払うのは、障害者がへんなことをしないかと注意する時くらい。現に、アメフトの部員とジェームズとの「接点」は、ジェームズに対するイジメから。ジョーンズの努力によって、ジェームズが学校やアメフト部員たちに溶けこんできた時も、チームの後援者の1人フランク（クリス・マルケイ）の息子は、ジェームズに対して悪質なイタズラを仕掛ける始末。

しかし、ジョーンズはこんなジェームズに対して「関心」を持ってやさしく声をかけ、練習場の中に彼を招き入れ、アメフトの練習を手伝わせることによって、少しずつ人間としての交流を広げていった。こんなジョーンズに対して、ジェームズの母親マギーは、「なぜ、ここまでしてくれるの？」と尋ねるが、これに対するジョーンズの答えは、「正しいことだから」というだけのもの。

ジェームズにとって唯一の心のよりどころだったマギーが心臓発作で倒れた時、そこにかけつけたジョーンズは、「大丈夫、お母さんはラジオの心の中にいつも生きている」とやさしく声をかけた。

そんな運命的な日、ジョーンズが娘のメアリーに話したのは、今まで誰にも話したことのないジョーンズのある体験。これこそが、ジョーンズがジェーム

ズに対して「関心」をもち、親切な行為をくり返してきた動機だった。

人は誰から学ぶのか？

ジェームズは、母親の目から見ればたしかに「人より少し頭の回転が遅いだけ」。しかし、一般的な社会の目で見れば、知能障害によってジェームズは、適切な社会生活を営むことができないため、多少なりとも社会的危険性があり、したがって、常に監視が必要で、場合によれば一般人から隔離すべき、と考えられる存在。

しかしそんなジェームズであっても、ジョーンズとの間で人間としての交流を進めていく中で、次第に人間関係にも慣れ、今や、昼食のメニューを告げる校内放送や、廊下を走る生徒に対して注意するのはジェームズの役割として定着していた。また、アメフトの試合をジョーンズの隣で応援するジェームズの姿は、観客の人気となっていた。

これを一般の人は、ジョーンズの善意や自己犠牲の中で、次第にジェームズが学び、成長してきたとみるようだ。しかし、ジョーンズの考え方や視点は、それとは全く異なるもの。

ジェームズをアメフトの世界から排除すべきと主張するフランクや、ジェームズのせいでアメフトの成績が下がってきている以上、それもやむなしと考える後援会の人々、そして、もともとはジョーンズを支持していながら、今は少しずつフランクの主張に引きずられていくダニエルズ校長（アルフレ・ウッダード）らに対して、ジョーンズが語りかけたのは、「ラジオを救うことによって、結局は自分たちが救われているのだ」ということ。

そして、今まで一番大切だったアメフト以上に、もっと大切なものを発見したジョーンズは、「コーチの辞任」を告げるのだった。映画の中におけるこのジョーンズの言葉は、実に説得力があるものだ。

私が都市問題の本を書いたり、映画評論を書いたりする中でいつも思うことは、ありとあらゆることが自分の勉強のターゲットであり、自分がそれらを学び吸収しようと思えば、あらゆるものやあらゆる人たちが教師になり、そこから学ぶことができるものだということ。

この映画は、そういう当然の真理と視点を、強く観客に対して示し、訴えかけている。

この映画は実在の物語！

この映画のラストには、実在のジョーンズと実在のジェームズの姿が登場する。この実在の人物2人の感動的な物語が世に出たのは、アメリカで最高の発行部数を誇るスポーツ専門雑誌、『スポーツ・イラストレイテッド』に、1996年ゲリー・スミス記者が書いた記事のため。実在のジェームズは、今50歳代となっているが、今もサウスカロライナ州アンダーソンの町一番の人気者で、今もハナ高校の名誉学生として授業にも出席し、何世代もの学生や教師陣から尊敬され愛されているとのこと。

また、実在のジョーンズは既にハナ高校を退職して、妻のリンダとともに過ごしているが、トーリン監督との長時間の話し合いの結果、ジョーンズは自分たちの物語の映画化を承諾したとのこと。

この映画は、きわめてシンプルに、ジョーンズとの交流というラジオ（ジェームズ）の人生の1部を取りあげて描くことによって、人間そのものについての感動を観客に与えてくれる名作。

ジェームズの名演とジョーンズ夫婦の名演

知的障害のあるラジオ（ジェームズ）という難役を見事に演じたのはキューバ・グッディング Jr.。そして、クールだが情熱的、そしてすごく人間的な魅力にあふれたジョーンズを演じたのは、つい最近『白いカラス』（03年）でニコール・キッドマンと共演して、いい味を見せていた名優エド・ハリス。

さらに、あまり表面に出てこないものの、常にこのジョーンズを支え、娘メアリーとの接点となっている妻のリンダ役は、『デブラ・ウィンガーを探して』（02年）という映画まで製作されたハリウッド女優のデブラ・ウィンガー。

やはり映画は、こういう心温まるドラマがいい。もちろん、それを納得させてくれるのも、これらの見事な役者たちがいてのことだろうが……。

2004(平成16)年8月4日記